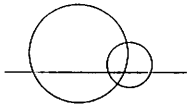


〔講演会〕



東亜同文書院大学から愛知大学へ

—オープン・リサーチ・センタープログラム事業にも関連して—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

【司会】 それでは、ただいまより講演会を再開いたします。工藤先生に続きまして藤田佳久東亜同文書院大学記念センター長にご講演いただきます。藤田先生は名古屋大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程で学ばれた後、奈良大学専任講師助教授を経て昭和54年以降愛知大学文学部助教授、教授を務められ現在に到ります。現在は愛知大学東亜同文書院大学記念センター長であり、そして日本砂漠緑化実践協会会長を務めておられます。また理学博士でいらっしゃる。主な著作といたしまして『日本の山村』を始め、地理学に関するご著書が多数。また、東亜同文書院に関しましては『中国との出会い 東亜同文書院・中国調査旅行記録』第1巻を始めとする著作も多く著されています。それでは藤田先生にご講演をお願いしたいと思います。藤田先生よろしくお願いたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきましたように、愛知大学の東亜同文書院大学記念センターのセンター長をやっています藤田と申します。先ほどの工藤さんの話にございました東亜同文書院は愛知大学にとって前身の学校として貴重な存在でありまして、戦後のある時期あたりまで中国にあった日本の学校、というようなことで少し偏見的なところもございました。日本国内の中国研究者のあいだにも、多分にイデオロギー的な見方がございました。アジアの中でもし

くはそんなに研究が進んだわけではありませんでした。

私はここにありますように地理学をやってまして、先ほど工藤さんのお話にありましたように、旅行記のほうから非常に興味を持ちました。愛知大学に移る前に中国に行くチャンスがあつて、当時は選ばれた人しか行けなかったんですね。私はやはり比較のために行きたいと思って何度もビザの申請をしました。ビザ用紙の下半分は「あなたが中国友好に果たした役割をお書きください」という欄があつて、そういうところに一言も書けませんでしたので、何回出しても駄目でした。ある日私の知り合いが「うちの親父が友好商社の社長をやってるから頼んでやる」と言われて、ビザ申請を出したら、何も書かなかったんですけど通りました。見事2週間。そして朝・昼・晩、見学と学習会。夜は毛沢東の歌を一生懸命習わされてあとで披露するという、そういう非常に目まぐるしい旅でした。当時中国は文化大革命が終わったほんの直後で、今の中国に比べますとほとんど活気がなかったですね。

そういう意味では中国は、制度は確かに新政権の下で変わったかも知れないけど、実態はあまり変わってないかも知れないと思いました。愛知大学へ移って確認しましたら図書館で大旅行の記録の整理がちょうど終わったばかりで、それをみると今の中国の基本的な部分を説き明かすのに充分可能性がありそうだということで、次々と読ませ



ていただきました。しかしその奥が今日お話しするようにこんなに深いとは当時思わなくて、当初は何が何だかよく分かりませんでした。書いてあることもほとんどどうも分からないというわけで、旅行班が一番苦労した行き先が、思うようにいなくて変更し、予備調査ができてないグループのコースのあとを追っかけて歩いて報告書の確認をしました。それで非常によくできてるということで、これだったら調査報告書に価値ありということで、この研究にのめり込んでいくことになりました。旅行記も展示には非常にきれいな文字で書いてあるページを紹介してるんですけど、達筆な草書も多くて、なかなか読みにくいところもありました。できればその記録をぜひ多くの人に知っていただきたいということで活字にしまして、これまで4冊ほど出しました。今、最後の巻、第5巻目ですけど『満州を駆ける』というタイトルで編集し、校正をしています。約550～560頁ぐらいの本です。それ以外にも東亜同文書院関係でいくつかまた論考がありますので、それも3月中に出す予定をしております。

ちょっと堅い話になりますけど、戦時中アメリカは日本と戦争をするに当たって、日本の情報を片っ端から集め、日本に来たことのないベネディクトが『菊と刀』という本を出して日本の精神構造を明らかにした、というようなことがありました。戦後翻訳されて日本人はびっくりしたんですね。データベース、情報を収集してそれを分析しまとめていくというような地域研究がアメリカで発展しまして、戦後のいわゆる文化人類学の発端になったわけです。それまではヨーロッパの社会民俗学的な学問が主で、未開民族を中心にして、未開民族の中に完全に融入するんじゃなくて外側にテントを張って、いかに彼らが未開かというのを一生懸命解き明かす学問でした。

そういう意味で、アメリカで誕生したこの方法は少し斬新だということで、地域研究という分野が確立します。しかし私が書院のこれを読んでみ

ますと、書院のほうがもう半世紀早く総合的な地域研究を中国と東南アジアでやっている。しかし日本は先ほどの工藤さんのお話じゃないですけど、戦争に負けました。したがって、そのせいか戦後の東西冷戦の中で、書院のこのスケールの大きい地域研究は陽の目をみなかつたわけです。そういう点で、今私が一生懸命やってる作業の一部は、書院の人達、あるいは書院を中心にした中国および東南アジアの地域研究はアメリカよりももう半世紀前の非常に先駆的な試みであり、成果であったのではないかということの世界の人々にもアピールできたらいいんじゃないかなということでありました。

旅行記だけではないんですけど、いったいこの書院とはどういう学校だったのかということ、先ほどの工藤さんと同じ思いをしたわけです。工藤さんには先ほど控え室とか展示室等でいろいろご説明を申し上げましたが、あの方はやっぱり頭のいい方ですね。ワーツと着想が湧いてきて、レジメとは全く違うお話をされて。書院の存在意義に気付かれて説明していかれました。そういう点ではやっぱりノンフィクションの作家の方で、大変能力のおありになる方だと思いました。私のほうは頭の回転がよくありませんので、スライドにしたがって少しお話をさせていただきたいと思えます。

なお今回、松坂屋さんの8階の大きなホールを貸していただくことになりました。松坂屋に愛知大学の卒業生が80人ほどおられるということで、我々は車道校舎のほうで経費をダウンしてやろうかと考えてたんですけども、どうしても松坂屋のほうでやっていただきたいというご要望がありました。要望は分かるんですがコストはずいぶんかかります。これが一番の難題でしたが、幸いに同窓会が基礎的部分に関しては面倒を見ましょうというふうに言っていただいて、それで松坂屋で実現することになりました。とはいえ、我々のほうで展示のためのセットをしまして、初日の前の

日は夕方6時半ぐらいまでかかりました。いつも展示をするというのはなかなか大変な作業なんです。またこのあと明日の夜、6時から8時まで2時間のあいだに展示物と設営物をわれわれの手で撤収をしなくちゃいけない。これがまた大変な作業なんです。

実はこういう作業は今度で9回目です。横浜からスタートしまして、この時は図書館展と一緒に、愛知大学を中心に据えていただいたので、25,000人ほど来ていただきました。全部の人が見たわけではないんですけど、相当数の人が東亜同文書院を知っていただきました。だから講演会も入りきれないぐらいの人が集まって、大変盛況でした。2年目は、東京の愛知大学東京事務所が37階の文科省のツインタワーに移転した記念に霞山会の相当大きなスペースを借りてやりました。それから3年目は弘前。今日途中で出てきますが、孫文の秘書をやった山田純三郎という人物の出身地です。それから米沢。これはつい先日やったばかりです。東亜同文書院大学最後の学長で愛知大学を作られた本間先生のご出身地。それから京都は書院の荒尾、根津の居宅地でしたからぜひやりたいと思っていましたが、なかなか場所が取れなかったんです。やっと見つけて日程が決まったら、祇園の真つ最中だったということがございまして、えらい時に当ててしまったということがあったんです。けれどもそれなりに集まっていただき、ありがたかったわけです。

それから神戸。これは孫文記念館というのがございまして、そこ我々の記念センターとがドッキングして展示をしました。その時に実感しました。愛知大学の孫文資料（生資料）は、実は先ほど触れた山田純三郎の息子さんの順造さんから寄贈していただいたんですけど、日本にある生資料として最大級のコレクションだとわかりました。先日も中国や台湾の孫文研究者が来訪され、これらの展示に感謝されました。台湾の国父記念館長にも来ていただいて、今後ネットワークを組んで

いきましょうというような話をいたしましたし、孫文の辛亥革命が起こったのが1911年、中国の漢口です。来年100周年ですね、辛亥革命100年目なので、大きな展示計画を立てている、ぜひ愛知大学の展示品を出展してくれないかというような申し込みもあつたりしました。

九州福岡でもやらせていただきました。上海とは隣同士でありまして、九州の方々もずいぶんたくさん書院に進学されました。今回の名古屋では全ての新聞社の方々にご後援をいただいたんですけど、福岡の時は西日本新聞という、中日新聞みたいな広域の地方紙ですが、論説委員に書院の方々が5～6人おられたということで大満足していただきました。新聞1頁大のコマーシャル記事を作っていただいた。普通でやると700万円かかるのを100万円にさせていただいたんですけど、我々にとって100万円でも非常に大金でした。だけどそれを見てずいぶん多くの方々、それから書院の関係の方々が、資料を持ってきていただいたり掛軸を寄贈していただいたりしてありがたかったです。

そしてもう1つ、アメリカのシカゴでやりました。3月の寒い「風の街」。雪が降ったり氷が張ったりする街で、延べにすると1週間近くやらせていただきました。これはアジア学会の中でやったんですけど、まあ書院のことをできれば日本だけでなく世界に知ってもらいたいということでした。そして最後は名古屋の方々に見ていただきたいということで、ここ松坂屋のホールでやることになったわけです。松坂屋という一番の都心でやらせていただいて幸いだったと思っております。

そういうような経緯がございまして、だいぶ多くの方々に書院の存在を知っていただくことになりました。書院は愛知大学の財産ではありますが、同時にその持つ意味というのは愛知大学を超えた非常に広い意味での日中近代史にもなります。私の関係から言うと地域研究ということにもなります。そういう非常に広い範囲で東亜同文



書院に注目が集まればいいなと思っております。そういう反響もけっこうあります。実際いろんな他の国からも「共同研究をやりたい」というような申し込みがございます。今後そういう発展があったらいいかなと思っております。今日は5年間のプロジェクト最後の展示と講演会でございますが、東亜同文書院の歩みを中心にしてプログラムに少し触れながらお話をさせていただきます。お疲れになってると思いますが、最後まで少しご協力いただければ大変ありがたいと思います。以下、パワーポイントでスライドをお示しします。

これが戦前、書院が一番輝いていた1920年代から30年代の、東亜同文書院の本館ですね。正門です。赤煉瓦造りの建物です。書院は上海の租界の外側をキャンパスの位置として選んだんですけど、当時はやっぱり清朝政府の末期でして、反対派が大砲を撃ち込んだりとか、火を付けたりとかするので、その影響を受けてしまって、2番目の一番右側の校舎の場所もそういうのでやられてしまいました。3番目は思いきりフランス租界の西側ですね、虹橋飛行場というのがありますが、あちらに近いところですね。今は都心にあり、高層ビルがいっぱい建ってますが、当時は田んぼの真ん中です。そこへ建てたのが東亜同文書院の3番目の建物で、ちょうど愛大の今の豊橋校舎ぐらいのキャンパス、5~6万坪ぐらいの広さです。グラウンドから中華学生部、農工科。農業と工学系ですね。それも付設したりして、総合的な大学をめざしていました。

ただし1937年の第2次上海事変の時に、書院は租界の外にありましたから、日本軍に追われてきた中国兵が逃亡ルート上にあった書院に火を付けてまして、3日間で全焼いたしました。一方、それまで仲の良かった隣の上海交通大学は避難民でいっぱいでした。そこでそこを借りて新しいキャンパスとして使用したわけです。しかし上海交通大学のほうは書院に占拠されたということになります。その前の37年までは隣土士の友好関係で、

書院でやる仮装行列を見に来たり、学生のクラブ活動も協力的にやっていました。現在交通大学は大学史(120年史)を作ってます。東亜同文書院とあまり歴史の長さが変わらないです。その中で1937年から終戦までどういうふうに描くかということで我々と交通大学は交流し、書院というものを知っていただきたいというので、戦前の東亜同文会の戦後の母体が霞山会、近衛篤磨公が理事長でした。雅号が霞山です。その霞山会の理事長に書院および愛知大学の卒業生で、山一証券の副社長北川文章氏という方が積極的に音頭を取って、交通大学と我々の、書院をめぐる共同研究をすすめることになりました。

一般的に言うと、中国の研究というのは非常にイデオロギー的なところがあつたり、演説調が多くてあまり研究的なことがされてません。これは中国の内部事情もあると思うんですけども、それはちょっと触れないことにしまして、しかし今度は向こうにもある資料をベースにして、きちんとした歴史観、歴史的な事実をベースにして研究しましょうと。そういう点でも中国にとっても初めての画期的な試みだったと思います。そういう点で交通大学と我々のセンターのほうはその後も交流を続けております。シンポジウムを書院のことに関して上海でやったんですね。それから愛知大学でもやりました。それも画期的でした。

ところで、書院創設には3人のキーパーソンがいます。真ん中が地元名古屋出身の荒尾精。この方が明治政府の軍職について、中国に出かけていって、岸田吟香(岸田劉生という画家のお父さんです)にお世話になりました。岸田はその前、横浜にいたヘボンに目薬の作り方を教えてもらって、上海で商売をして大繁盛した。そのスポンサーを得て荒尾は漢口(中国の真ん中の長江を遡ったところ)で本屋をやったり目薬を売ったりして、中国の今まで知らなかった世界を初めて知ったのです。『清国通商綜覧』という1,000頁を超えるような大きな本を出して、これが日本人

による中国の実態を著した最初の本でした。それまでの中国は漢詩漢文しか日本人は知りませんでした。それはインテリゲンチヤの人達が美しさだけを描いた世界ですから、日本人は中国は美しいもんだと思っていましたけど、現実はずしもそうじゃないというところを知ったのです。

中国には当時貿易をするに値する資源、品物がたくさんありました。当時の明治政府は欧米志向だけけれど、中国に目を向けたら列強の支配に苦しむ中国の人々に救いを与えることが出来るのだと。ちょうど今の日中関係とよく似ています。というより、当時の方向が今になってようやく実現したのだと言えるでしょう。貿易を活発にすることによって両方が発展する、そういう構想を抱いたのです。だからそのためのビジネススクールを作ろうというので、日清貿易研究所というのを日清戦争の4年前、1890年に上海に作って、150人ほどの学生が中国に渡りました。しかし、戦争によって残念ながら引き揚げざるを得なかったのです。日清戦争後、改めてきちんとした学校を作りたいというので、一番左の近衛篤磨公、この方は貴族院の議長をやったり、ヨーロッパに留学して近衛家の中ではやっぱりずいぶん開明的で優れた人ですね。その人が広い世界を、ヨーロッパからずっと船でアジア、そして日本に帰ってきた。その途中で中国の土地を巡って書院の学校の場所を求めようとしたりしたのです。一番右の根津一、この方が院長ですけど、この院長役を中心にして南京同文書院が1900年、南京に作ったんですね。しかし義和団の乱でずっと混乱が続いたので、1901年、上海へ移るわけです。そこで東亜同文書院がオープンしました。

これは歴代の院長です。見にくいかも知れませんが、一番左下が先ほど工藤さんが言われた近衛文磨院長ですね。このあと戦時中に総理大臣になります。右下が最後に書院を閉校にして愛知大学を作った本間先生、学長であります。次に岸田吟香の若い時の写真ですね。ああいう形で上海で

も活躍していました。真ん中の下が晩年の岸田吟香です。その息子さんが岸田劉生で「麗子像」を描かれた。そのお弟子さんが高須さんと言って豊橋で豊川堂という書店を経営された。その方がデザインされたのが愛知大学のロゴで、まあその辺でつながってますよということになります。

先ほどの荒尾精が中国各地で集めた情報を、地名を中心に分布図を作成しますとほとんど全域に及んでいます。中国中の情報を網羅したということが分かります。これは銅の製品ですね。非常に素晴らしい。日本でも評価が高い製品があつて、これは貿易の対象になりますよというような見本ですね。こういう見本をたくさん収録しています。ここに系統図をお示しします。一番上から荒尾精、根津一と書いてあります。左のほうに日清貿易研究所。そして左のほう、東亜会と同文会というのは日清戦争後にできた団体です。同文会のトップが近衛篤磨でありまして、これが合体して東亜同文会となりました。篤磨が会長になりまして、清国の保全と清国の強化をめざします。そのために、教育文化事業で日中間をしっかりと提携する必要があるということで、教育の普及を進めるわけです。それと合わせてビジネススクールとしての貿易実務者養成ということも踏まえて東亜同文書院が上海につくった。これは日清貿易研究所です。写真がハレーションで薄くなってしまってますが、みんな胸のところに自分の名前を吊っています。これはいいですね、名前を覚えるのに。こういう写真がいくつか残ってますが、そのうちの1枚です。

東亜同文会のそういう学校経営はいくつかございましたが、その発端は1898年、東京同文書院が作られました。日本がアメリカに負けて、しかし戦後アメリカへ留学した人がたくさんいるように、清国も日本に負けて日本へたくさんの方が留学しました。その受け皿として東京同文書院を東亜同文会が経営して作ったんですね。明治のことです。これは近衛篤磨公の住いのある目白です。そしてそのあと、朝鮮半島がまだ日本の植民地と



なる以前ですね、学校教育がうまくいってない。まあ李朝は李朝なりに政治システムを持ってましたけど学校制度は不十分でした。そのあと東亜同文書院が上海にオープンし、あとはいろいろな語学学校、中学校等を設け、戦争に入った頃から経済専門学校、北京にありますね。工業専門学校。そういうようなところも併合しています。もちろんこの中で一番の主力は東亜同文書院でありませぬ。戦後になって、書院は世界の中でスパイ学校でなかったかというようなことがよく言われますけれども、カリキュラムをみますと、授業科目が非常に真面目で語学中心、貿易実務担当者用の科目を徹底的に実施しています。それから商業貿易関係ですね。まあビジネススクールですね。

今から15～16年前、書院の卒業生が1,400人ほどおられました。今はもう残念ですが数百人になってしまったんですけど、その1,400人の時にアンケートをとって、どこの出身でどこから受けたかということを探りました。左側は古い時代の人達ですね。全国に広く分布しています。これは根津一院長が、東亜同文会というのは民間ですのでお金がないということで、日清戦争直後、各都道府県を回って県費生、県のお金で2人の枠を推薦してくれと説いて回りました。我々が教育の面倒を見るからということ。当時は日清戦争の直後でしたから、欧米志向から隣の中国に関心を持つ県も多くなって、じゃあそういうことに乗ろうという県が出てきました。あるいは近衛公にあまり賛同してない知事もいたんですね。しかし基本は2人ずつ。各県で試験をやって学生を採る。したがって授業は只ですから。しかもお小遣いが1週間に1ドル配られました。条件としては良かった。まあ当時は師範学校とか軍関係の学校も授業料はタダでしたけど、こういう実業系の学校は書院だけでした。しかもアジアで最大の国際都市上海で学ぶということで志願者がたくさんあり、福岡県あたりは2人のところへ100人ぐらい志望者がありました。だから福岡県は途中で3

人とか4人に増やしたりしたことがございます。それでもやっぱり志望者が多くて入りきれないので、私費生として、授業料を払って入学する枠も設けましょうというわけで、30人ぐらい募集するようになりました。それを毎年これは東京で一斉に試験をやりますけど、3,000人ぐらい志望者が集まったので100人に1人という激戦でした。

入学の時の夢は中国で働きたいとか、骨を埋めたい、日本と中国の橋渡し役、アジアの発展役、中国のために中国で骨を埋めたい、など、いろいろな夢をたくさんもっておられました。この表の上のほうは左から古いほうです。書院は1901年にできましたので、1901年に入った人が1期生。だからたとえば25期生と言うと1925年に入った人で、分かりやすい。まあ古いほうの方は当時もうあまりご存命でなかったので、アンケートでは20期代の数名と、30期代ぐらいから後しか調査できませんでしたが、そういう意気込みが分かります。中には先ほど申しましたように、書院の卒業生でありながら早くに中国でいろいろ活躍し始めた人がおられた。山田良政という人は青森の弘前市出身です。南京同文書院が開学した時に、教授兼事務職で入った。当時の学校ですから、小さいですからいろんなことをやったと思うんですけど、孫文の協力者になり、初めての一斉蜂起のさい、広東省の惠州へ駆けつけた。本部からは「動くな」という注告があったんですけど、動いてしまった。そして命を落とした。1人だけ中国人でない服装をしたのがいたという、その時の清国側の報告者が台湾の資料調査で出てきました。

孫文は良政を非常にそういう点で言いますと敬意をもって扱った。その弟の純三郎は兄の意志を継いで孫文の秘書になりました。その息子の順造氏は父の孫文コレクションをベースに孫文博物館を建設する予定でしたが、体調をくずし本学へ寄贈していただいたのです。

どのような人達が卒業生にいるのかと言うと、たくさんおられるんですけど、この中で特に有名

なのは白岩龍平さん。この人は日清貿易研究所の卒業生です。いわゆる揚子江（長江）の航路をきちんと整備して汽船会社をつくります。中国に実業界のベースを作っていた人です。東亜同文書の理事もやった人ですね。次は林出賢次郎。大倉邦彦。林出さんは後でお話に出てきますのでちょっと省いて、大倉さんは製紙会社を興されて、今は亡くなった大倉さんの精神文化研究所が横浜にできて、私も1度お邪魔したことがあります。中山優という方は書院の卒業生ですけど、在学中は授業にほとんど出なかったそうです。先ほどの工藤さんのお話ですと、そういう逸話が一人歩きするというので私も自信がありませんけど、図書館ばかりで勉強しました。のちに建国大学設立の時に教授として引っぱり出された人物です。これは外交官の石射猪太郎。真ん中のところの白い洋服を着た方です。この方は書院の精神で生きた方で、太平洋戦争が次第に色濃くなってきた時に東亜局長として軍と対立し反対したと言いますか、そういう精神の持ち主で、そういう点では戦後になってから評価された。本日は同じ後輩の小崎先生がお見えになっていますけど、小崎先生の先輩に当たります。宗方小太郎。この方は書院を後ろでサポートした方です。なかなか元気者の方だったわけですね。政治的な力量もありました。田中徹雄という方は戦後山梨県の副知事までやった方ですけど、戦争中に相手の敵と交渉してなるべくお互いに被害を少なくしようと、夜陰に紛れて交渉に行ったという傑物です。

次の3人の方は先ほど工藤さんのお話にありました中華学生部の方々であります。それぞれ異なった人生を歩まれました。その話はここではカットいたしますけど、書院を中心にして共産党の細胞になったり、あるいは書院で一生懸命勉学に頑張った。戦後中国の中でも三人三様の歩みでした。今から十数年ほど前、中国から社会科学の使節団が来た時に団長で来られた方は中華学生部の卒業生でした。まあ東亜同文書院を出たという

ことは文化大革命の時あたりまでは少し問題になったかも知れませんが、今の中国では大丈夫ということのようです。

卒業生の中には大城さん、沖縄で文学のトップの方もおられます。私が沖縄に行った時にインタビューをさせていただいた時の写真です。このように作家になられた方もありますが、基本はやっぱり商社です。商社ですと当時としては大きな企業ですね。そういうところにずいぶんたくさんの方が就職されています。それから海運会社、紡績。当時日本ではシルクでしたね。それから金融。金融も横浜正金銀行、今はないですけど。外地にあった金融機関も多いですね。満州国に入った方もおられた。報道のほうでは大陸にあったメディアですけど、あまりご覧になっておられる方は多くないと思います。それから国内の新聞社。主な新聞社にはほとんど皆さん入っておられますね。というわけでずいぶんメディアのほうでも活躍をされました。それから外交官は先ほどの林出賢次郎さん。この方はあとでお話しますが日本人としては最初の西域調査を、他の書院の卒業生4人の方と一緒にやった方です。その後外務省に入られて、満州国ができた時溥儀の事実上の秘書となりました。しかし溥儀の肩を持ちすぎるというので軍部から辞めさせられてしまったということがございます。

小崎先生。小崎先生は我々の頼みと言うとちょっとオーバーになるかも知れませんが、現在88歳であります。非常にお元気で、書院を卒業され愛知大学に入られて卒業され、外務省に入られ、いくつかの国の大使をされた方です。それから学界関係ですね。戦後の分だけでも80数人が大学の教授になっておられます。上の右から3番目、馬場鞆太郎という人が、あとでお話します大旅行の指導者です。書院の卒業生でもあります。

今度はせっかくですので愛知県出身者であります。名簿が完全にピシッと分かってない方もあ



ります。そこでこれは今日先ほど司会をやっていた武井さんのほうで調べていただいたわけですが、明治から大正期に入学者が103人いた。全体としては150人ぐらい愛知県から書院へ入りました。全国平均からすると多いほうです。当時は中学校からの進学ですね。まだ書院も大学に昇格していませんでした。高等専門学校でした。愛知一中とか、明倫中学とか、熱田中学とか、津島、岡崎、豊橋、東海、半田、名古屋。名古屋中学というのは私立の学校です。こういう形で書院に入学されてます。1909年に入学した人ですね。3人。現地で就職をしたり、あるいは名古屋に帰ってきた人もちらほらと見えます。これは19期で非常に数が多いですけど、この時は私費生です。自分のお金で授業料を払ってまで。だから全国の統一試験の成績が非常に良かったのではないかなと思います。給費生は県から2人の枠しかありませんので、私費生として書院に入ったのです。それから20期代ですね、24期と25期と26期、それぞれ見させていただきました。名古屋の商工会議所で活躍された方もおられます。

これは戦後滬友会、「滬」は上海の古い名前ですが、卒業生の会が名古屋市で結成されました。その時の会員がどこに住んでいたか。出身というわけではないんですけど、三重県では津、四日市、名古屋市あたりに集まってきて、次は豊橋ですね。こんな形で会員が集ってるのが分かります。

入学生は中国へ渡りましたが、最初は書院にお金がなかったので国内旅行は修学旅行でした。「こんなつまらないな」とよく書いてあります。しかし日露戦争が始まった頃、日英同盟がその直前に結ばれて、イギリスからの要請で今の新疆のほうにロシアの勢力がどのぐらい進出してるかの調査を日本に託した。イギリスはインドとか南のほうは植民地として持ってましたけど、チベット高原が越えられませんでした。チベットは鎖国をしていましたから。しかし外務省はそれに

応えられなくて東亜同文書院に頼んできた。そこで1902年に入った生徒が卒業する時に5人選ばれて西域調査へ入ったわけです。これは波多野養作という方です。先ほどの林出賢次郎という溥儀の秘書をやった方も同じ仲間以西のほうへ行きました。こんな感じで西域のほうへ行ったわけです。そして5人が5人とも生死をさまよいつつ戻ってきて報告書を書いたのです。これがそのルートです。日本人のシルクロードの調査の最初だと思います。

これは先ほどの林出さんですけど、現地のモンゴル族の王様にかわいがられて、もう1回現地へ行って教育システムを教えた。それが縁で在校生達が「俺達も行きたい」ということになった折に、外務省から5人のお礼に3万円寄付があって、学生が3年分ぐらいグループで旅行ができるということで、要望に応じて学生達の自主編成、自主計画、自主コースで、こんな感じで、3か月から6か月間、中国あるいは東南アジアへ散って行ったわけです。まあこんなふうな出発前の光景です。車が映っていても上海駅までぐらいしか行かない。そこから先は地図だけです。出発時の写真がいろいろ残ってます。これがビザです。行先がみんな書かれて、現地へ行きますと、まあ民国になってからですと民国政府が各県知事に伝えてあるんですね。知事が彼等を受け入れて情報を提供する。こんなコースですけど目的地へ行くのになるべくあっちこっち遠回りをして、よく見て、現地へ行く。帰りもまたいろんなところを回って帰ってくる。そういうコースです。しかし当時は地図がありませんでしたから、歩幅で1歩何cmあるか調べて、方位を確認しながらこういう地図を作りました。この写真は「箱根の山は～函谷関～」の函谷関です。非常に荒れています。彼らが撮影したたくさんの写真が残ってます。真ん中は軍閥のトップですね。ほとんどの軍閥のトップは日本へ留学した人です。先ほどの東京同文書院もそうですけど。日本へ留学した人達が辛亥革命があった

時、国内が混乱しますと各省を単位にして政権を支配するわけですね。それが多くの軍閥政権です。常に軍閥同士の戦争がありまして、書院の人達もスパイじゃないかって捕まって、しかし書院生だと分かると尊敬されてすぐ釈放してもらった。

また東南アジアへも行ってます。東南アジアの旅行記を見ますと、日本人は現地ですべて非常に尊敬されていたことがわかります。日露戦争に勝った日本という評価もあったんでしょ。東南アジアはタイ以外は植民地でした。日本人は指導者として評判が非常に良かった。そういう意味でも第2次大戦の時の戦争のやり方というのはそのような日本の立場を破壊したということがわかります。これはベトナムの風景で下が日本橋。日本人が住んでいたという。橋の上に建物があるんですね。ちょっと写りが悪くて恐縮です。上はユエ。古い都で、日本で言うと京都みたいところです。賀茂川に当たる川です。

満州もコースが多い。満州事変が起きたあと、さすがに民国政府も2年間学生達にビザを発給しませんでした。したがって行くところはもう満州しかなかったんです。学生達はずいぶん中国奥地のプランを立ててたんですけど、行けなくなって残念がっています。結局満州で非常に緻密な調査ができた。満州情報がこの2年間で書院生の手にとくさん集められました。

いろいろなテーマを左のほうに示しました。右のほうに対象地域です。テーマの幅がどんどん広がって、商業、経済だけではなくて教育、文化等にも広がっていく様子がわかります。しかし、戦争が厳しくなるとこういうコース、香港、広東から北京、大連あたりまでとなっています。もっと厳しくなるともう海岸線だけに縮小していきます。各期別に見ますと全部で700コースぐらい行なわれたということがわかります。したがってこれらの旅行の記録が非常に貴重なんです。1つは日記。これは後輩が同じコースに行った時の情報がわかります。朝から晩までのことが全て書

いてある。もう1つは卒業論文になったテーマですね。これらの記録は20世紀前半の中国および東南アジアの情報として、他には例がないというふうに思います。これまで、それに関する研究は私ぐらいしかしっかりやらなかったの、今後は多くの人達にやってもらった方がいいんじゃないかなというふうに思います。

それらの調査をベースに本が出版されております。これが現在の本。先ほどお話があった第3版ですね。『支那省別全誌』はその代表的な日本人の手による本格的な地誌として出版されました。最初は18巻。新修版は戦争が起こってしまったので、途中第9巻までしか出版されなかったです。これは8巻目の新疆省。ジャーナルも『支那研究』が大学へ昇格しますと『東亜研究』という名前に変わった。

そういうのをいろいろ整理しますと興味深い中国像が描けます。これはお金ですね。当時中国は統一貨幣はありませんでした。旅行記の中に描かれている紙幣を種別に分布図化しますと、これだけ多種類のあることがわかります。同じ貨幣が使われているところをくくりますと経済圏が浮かび上がることになります。今度は言語。これもいろいろ出てきます。同じ言語をまとめますとこういうふうに文化圏、あるいは社会圏が示されます。両者を統一しますとこういうふうになって、経済と社会文化が重なるところはやっぱり1つの地域として伝統的なまとまりを浮かび上らせることが出来ます。だからこういうのが中国の中にあるということ。今日の我々が知っておくと、研究あるいは中国に進出したりマーケティングにも有効ではないかなと思います。これは阿片の栽培地の分布図ですね。北西の乾燥地帯。これは暴動発生の分布です。書院生も暴動現場によく遭ってます。しかし、この大旅行で1人の事故死者もありませんでした。身ぐるみ剥がされたケースはありますが。省の境目に出没する上匪によるものです。その成立過程はちょっとここでは省きますけど、そうい



う状況が克明に描かれています。これは、1925年の上海5・30事件。これは反英反日の運動で、大旅行へ出発したあとの5月30日に上海で事件が起きましたので、そのあと書院生が各地で反日デモに遭ったり、石をぶつけられたり、公開討論会に引っぱり出されたりしました。そういう記録を拾い出し、図化できます。これは軍閥の人達の勢力図ですね。あんまりこういう図は出てこないですね。これは軍閥の人達が競って近代化した都市です。今中国へ行きますとパブリックな公園とか広い道路が各都市に見られますけど、その発端は軍閥の人達が日本留学の経験を生かしてつくり出したものです。軍閥と言うと何となくあまりいいイメージないんですけど、実際は近代化を進めたインテリという側面もありました。ただ戦争ばかりやってた軍閥もあります。そういうところは陝西省なんかもそうですけど疲弊していました。山東省も疲弊していました。

これは近代化の波が清末からスタートし、1930年代にストップしてしまって、そのあと人民中国の誕生、文化大革命がつづき、1990年ぐらいから本格的に改革開放がつづきます。そのさい導入された資本主義は1930年代への接合であり、しかもそのベースには伝統的な中国社会ですね。その中の資本主義的な側面への接合です。

これが戦後の愛知大学を作った本間先生です。ほかに林、小岩井両学長と3人、展示にありましたね。真ん中が本間学長です。本間学長は書院最後の学長で、豊橋にあった旧陸軍第15師団司令部、のちに陸軍予備士官学校になりましたけど、その場所に1946年、愛知大学を創設しました。GHQ支配下で書院の名前を使用出来ず、「知を愛する」名前にしたのです。

最後に、われわれが行って来た「オープン・リサーチ・センター」プロジェクトでこれまでの5年間どんなことをやってきたのかということをご紹介します。このプロジェクトの出発点は、100歳になった書院の卒業生の安澤さんという方にお

願いして、自分の人生の中での書院のお話をしていただきました。併せて、学長の本間先生が最後に非常にご苦勞をされて東亜同文書院から愛大の創設を行った創設期の状況を紹介したブックレットも作成しました。なお、今日はこの会場出口のところに本間先生の銅像が愛知大学の卒業生の越知さんの手によって展示されています。またお帰りの時にちょっと見ていただければと思います。これが第1回目の横浜の展示会です。大きな会場で、そこでやった時の盛況ぶりです。2年目の展示、講演会は霞山会館です。東京です。これが3年目の弘前会場ですね。こんな形で行なってきたのですが、なかなか大変でした。イベント屋さんみたいで。若い方々にいろいろお手伝いいただいて、準備から展示、説明、講演、そして撤収、運搬まで行いました。弘前の時は行く前の日に大地震が東北でありまして、鉄道は仙台でストップ。高速バスで何とか弘前まで何とか行けましたけど、なかなか大変でした。これは次の福岡展示会。漫画「アンパンマン」のやなせたかしさんをお招きしました。お父さんが書院の卒業生で、福建省で亡くなられた。そういう話をご自身に重ねながら講演されました。これはシカゴでやった時のチラシ、パンフレットです。英語に全部直さなくちゃいけないのでその辺苦勞しました。こんな感じで日本色を出しました。その時のわれわれ全員の集合写真です。この方が先ほどの小崎先生です。これは講演をやった時のチラシ。今度は神戸ですね。神戸で孫文記念館と提携して一部の展示をお借りしました。講演会の様子です。多くの人達に集まっていただきました。これが5年目で、京都。祇園の時と一緒になっていました。これが先ほどの本間先生の故郷米沢でやった時です。そして今名古屋、松坂屋で、これで9回目です。全国縦断行脚でしたけど、それぞれ縁をもった土地でやらせていただきました。そして多くの人々に入場していただきました。

今度は国内および国際シンポジウムでありま

す。これは中国の上海の研究者達も呼んで行った10人ぐらいの発表者による共同研究ですね。歴史的な資料に基づいて研究をする。その時の様子です。これは日中合作で画期的だったと思います。中国の研究者にとっても画期的だったと思います。講演会もたくさんやりました。そのうちの主なものだけ示しました。東亜同文会が東アジアでどんな研究活動をしたか。こういうのを調べてみますとけっこうそれに見合った研究者がおられるんですね。そういう方々をお呼びして講演していただきました。これは今年のシンポジウムですね。欧米の研究者は東亜同文書院をどういうふうに見てるのか。中国と日本という微妙な関係とはまた違って、欧米の人達はまたグローバルな見方なんですね。書院が上海に進出してきて、調査研究をやる。欧米の人達はびっくりした。そのうちアメリカの研究者の人は、欧米から中国へ進出したミッションスクールは精神的なことを教えた。今中国ではキリスト教も復活してる。だから我々のミッションスクールは今中国で生きているというような話をされました。それに対して日本の研究者の人達からのコメントは、いやそうじゃない、それだけじゃない、東亜同文書院の方は実学からスタートして、しかも世界的な影響力を持ったという形で評価してもいいだろうという発表がございました。フランスとアメリカの研究者のあいだで、スパイ論争もありました。これは閉鎖された地域の中に入って情報を持つてくるというのがスパイであり、普通の我々が簡単な調査をするだけでスパイ視されるのはどうかということでした。

愛知大学は上海から引揚げてきた書院が中心ですけど、同時に多くの海外から引き揚げてきた学生も愛知大学に入りました。そのうちの5つ、ハルピン学院、京城経専、建国大学等々の学校の方々をお招きして、愛大とその教育を受けた出身校とを含めての経験をお話いただきました。満州の青少年義勇軍についてはアメリカの研究者です。日本から満州に送られた一団の中に青少年が

いたことに非常に関心を持った人で、その話をしていただきました。それからあと、こういうような愛知大学史の展示会ですね。中国語を書院でどういうふうに教育したか。これも写真にありますね。左のほうが共学で中国人と日本人の教師が2人で学生を教える。徹底した中国語教育をやったという写真。それからこれは世界の中の愛知大学というような、スケールの大きい講演会をやりました。これは荒尾精先生の思想というようなことで、今日ご出席の村上さんにお話を伺いました。村上さんのお父さんが書院の卒業生であります。上海にあった靖国神社を守っておられました。大学昇格になったために、留年の人達を1つ作ったんですね。1945年入学生が46期生になってしまう。しかし東シナ海はアメリカ軍の攻撃で上海へ渡れない。そのため富山県の呉羽紡績で半年間を過ごしたわけです。その時の経験者からもお話をいただきました。

しかしこれは愛知大学の開学にとって非常にラッキーでした。東亜同文会に中国から送られてきた旅行記と、あるいは中国関係の本35,000冊あまりありましたが、それが進駐軍が進駐してくる時に、文部省の隣に頑丈に建てた東亜同文会の建物を米軍が撤収するという事になったわけです。そういう図書と調査報告書等をみんなアメリカに持っていかれてしまうというので、富山から呉羽校舎の有志達がギョウギョウ詰めの汽車で東京へ出向き、1晩のうちに本をトラックに掻き出して都内の某所へ隠したわけです。それが元になって愛知大学はあと10,000冊を全国の古本屋から集めて45,000冊で戦後の愛知大学がスタートしました。もしその時に本がなければおそらく愛知大学はできなかったかも知れませんし、へたをすると我々の調査もできなかった。アメリカの国会図書館あたりの隅っこのほうで埋もれてしまっていたかも知れない。愛知大学の非常にドラマチックな歴史を持った誕生秘話といえます。

次に東亜同文書院関係のこれは市民向けの講座



ですね。我々のスタッフが分担して講座を開きました。個人的にこういうようなタイトルで卒業生にお話をしていただいたこともあります。展示施設もずいぶん整備しました。真ん中の一番下の写真のように講義室を作ることもできました。ぜひ豊橋のほうへ来られる時は本学へ寄っていただきますと、火曜日から土曜日まで、朝10時から4時半まで、オープンしています。ここに持って来られない資料もたくさん展示してありますので、ぜひおいでいただければ大変ありがたいですね。

これは先ほどお話しした東京同文書院です。清国の留学生を受け入れました。東京の中央大学の付属高校の先生が一生懸命研究されてきた。唯一その方だけですね、この研究をやっているのは。その方に来ていただいて発表していただきました。これはドイツの方のアジア主義の講演。そしてこれは今回のメインテーマと同じです。その講演を本学の先生からいただきました。中国語教育については、これはテレビのNHK宮田一郎先生のご講演。先生は書院の卒業生です。一番最初に申しました上海の交通大学を1938年から利用したということは、これは借用だったのか占拠だったのか。北川さん、先ほど申しました山一証券の副社長をされた方、上海交通大学との関係を非常に大切に進めていただいた方です。その方に来ていただいてそういうお話もしていただきました。下の写真は上海交通大学の正門です。そしてこういう授業の成果として、葉先生という上海交通大学の今大学史の編纂委員長をやっておられる方に来ていただいて講演をしていただきました。我々の持つる基金の表彰式の授賞もしていただきました。我々のためにも一生懸命やっていただいた方です。そういう点で交通大学とのあいだは良好な関係で結んでおります。あと左上は本間先生のご令嬢の殿岡さん。東京の「渋谷の母」だったかな、手相を拝見でテレビにも出演されたりしています。

そしていろんな方々が我々のセンターに見学に

来られる。アメリカから来たり、台湾から来たり。中国からもたくさん来られます。現物が置いてあると「これはこのままではいけない。盗られたらどうするんですか」とみんなに心配していただいて。我々はそこまで認識してなかったんですけど、来る度に同じことを皆さん言われるので、今少しづつレプリカを作りつつあります。

どんな成果を出しているか。これは『オープン・リサーチ・センター年報』であります。第4号までが出て、今年は5号目です。背表紙は毎年厚くなって、500頁、600頁のボリュームがあります。ずいぶん厚くなってると思います。『愛知大学史研究』も第3号まで出しました。それからこういうブックレットですね。いろんな方に来ていただいて講演していただいたものをブックレットにしています。ご覧になっていただいたらおわかりになるでしょう。「ガンダム」の作者安彦先生の満州の作品ですね。これが京都の本屋さんから沢山注文が来ました。こういう大調査旅行の写真集。そのほか中国本土、満州関係など沢山刊行しました。東三河のミュージアムと連携を図って、ネットワークも図り、地元のミュージアム紹介のブックレットもつくりました。あとこういうニュースレターですね。なかなか大変ですが、楽しい仕事でもありました。

ところで、本間先生。特に今回の我々の事業の中では愛知大学を創設された本間学長の苦労というものをもう1回きちんと評価していこうということで、本間先生の記念室もきちんと作りました。こんな形で我々の歴史が作られたんですよ、また本間先生はこういう方でしたという記念室です。また、豊橋のいろんな歴史的な事物に関して、学生諸君のマンガ研究会の人達にマップを作ってもらって、愛知大学に入ってきた学生の人達に渡して、それを見て学内を歩いてもらったかどうか、もちろん記念センターが出发点であります。そんな工夫もしてみました。そしてDVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み」。これは受付のとこ

ろで希望者の方にお渡ししていると思いますけど、このDVDに書院時代からの歴史的な画像をたくさん収録してあります。それから「愛知大学の歩み」の画像も作成しました。本日、展示会場の最後のコーナーの展示がそれで、愛知大学創設期のパネル展示として並べています。これに関しては愛知大学の卒業生の方に非常に尽力していただきました。

そういうわけでちょっと慌ただしいご説明をして大変恐縮ですが、以上で私の説明を終わらせていただきます。これで大きな流れが掴んでいただけたらと思います。それでもう1度くりかえしになりますが、これを機会に愛知大学豊橋校舎にあります東亜同文書院大学記念センターにお越しいただいて、明治中期から始まる東亜同文書院史と孫文関係コレクション、そして戦後の愛知大学史の時代の中でのトピックスにもふれていただけたらと思います。

これで私のお話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 藤田先生ありがとうございました。では質問のある方は挙手をお願いいたします。恐れ入りますがご所属とお名前をおっしゃってください。マイク係の者がすぐにまいりますので、ちょっとお待ちください。

【カモ】 先生、今日はどうも分かり易く説明ありがとうございました。西尾からまいりましたカモと言います。西尾の観光の案内をしてる者です。西尾で今京都から移築した近衛邸が西尾の城址に建っていて、市内外からの人気スポットになっています。今日は近衛家のテーマもあるということで参加しました。先生の説明にもあったんですが、もうちょっと詳しく説明していただきたいのは、同文会というのはどういう意味でそういう名前が付いたか。それから近衛さんが東亜同文書院との関わりがあったのかわからないのか、どの辺まで関わりがあったのか、そういうところをちょっと教えて

いただければ。

【司会】 では今のご質問に関しまして藤田先生、お願いできればと思います。

【藤田】 これで見てくださいますと、ちょうど真ん中に、日清戦争の終わったあと国内にアジアへの視点をもったいろんな団体ができるんですね。それは清国に勝利したということで、かなりナショナリズム的な匂いのするのが多かったんですけど、この中で当時、論陣を張った指導的立場の人達がそれぞれ組織を作った中に東亜会と同文会というのがございまして、その2つがやがて京都で合体するわけですね。それで東亜同文会というのが成立します。その時、近衛篤磨公がまとめ役をやっていた同文会がそのまま東亜同文会になりました。東亜同文会という名称は東亜会と同文会が合体したので、まあ最近の市町村合併の名前みたいなものです。そのまとめ役として近衛さんが会長になったんですね。これが実は東亜同文書院の経営母体です。そういう点では大きく東亜同文書院と関係するわけです。また、近衛篤磨さんの御子息文磨さんは東亜同文書院の院長にも就任され、そのあと戦時体制下で総理大臣になられます。したがって、現在の愛知大学の中でもずっと近衛家は愛知大学の理事でした。理事として入っておられます。そういう伝統が生きています。

【カモ】 ありがとうございます。

【司会】 はい、ありがとうございます。因みに私のほうから補足しますと、こちらのスクリーンに映し出されてる表は、藤田先生のレジメの1頁にも載ってございますので、またご覧いただければと思います。時間の関係もありますが、もしどうしても質問してみたいという方がいらっしゃいましたら、あともう1人だけお受けいたします。いかがでしょうか。はい、どうぞ。

【寺田】 港区から来ました寺田ヒロコと申します。父親は東亜同文書院の卒業で、大旅行の話を常にしていたのを思い出します。その時たぶん卒論みたいな形で書いて残したと思うんですけど

も、その資料というものはあるのでしょうか。そしてもしあるとしたら拝見できるのでしょうか。

【藤田】 1936年までだったら充分見られる可能性があります。何年卒ですか？

【寺田】 12期くらい……。

【藤田】 ああ12期だったら充分可能性があります。

【寺田】 ありがとうございます。

【藤田】 手書きの部分と、それから活字にダイジェストした部分と両方、うまくいくと見つけることができます。受付でお名前と、何期というのを書いていただけたら、あとでコピーしてお送りすることができます。

【司会】 ありがとうございます。では閉会のほうに移ってまいります。今し方ご講演された藤田センター長より閉会のご挨拶がございます。藤田先生よろしくお願ひいたします。

【藤田】 あらためてご挨拶ということで大変恐縮です。今日は長時間にわたりまして、我々の講演会をご清聴いただきまして大変ありがとうございました。我々の活動はこういう形でやってまいりまして、これも今後よりグローバルなレベルで展開できていったらと思っております。そういう意味で、これまで書院の方々にもずいぶんお世話になりました。もちろん愛知大学の我々の関係スタッフにもお世話になりました。ありがとうございます。こういうことですので、ぜひ豊橋校舎のほうにも来ていただき、ご覧いただければさらにありがたいと思っております。一番最初に私が申しましたように、地域研究という点では、まあ中国語研究もそうですけど、やっぱり東亜同文書院の中国および東南アジアの研究というのは組織的

にも世界最大級だと言えらると思います。そういう点でこれをぜひ世界の方々にも知っていただけたらいいんじゃないか。とりわけ今の中国の20世紀前半の戦争ばかりやっていた時期に書院生が生の中国や東南アジアを記録したわけです、こういう資料は他にはありません。だから今の中国政府関係機関も我々の資料を欲しがっています。そういうこともあって、東アジアの空白を埋め得る書院の方々の足で稼いで記録した事業とその内容は、十分再評価されるべきものと思っています。そういう点で今後ともぜひ皆さん方にも温かく見守っていただけたらというふうに思っています。

また今回松坂屋の皆さんとか、出入りの業者の方にもお世話になりました。それからそれぞれの新聞社の方々にもご後援をいただいてきました。書院の卒業生の方々、先ほどの東亜同文会の後継である霞山会の方々にもお世話になりました。そういう点では我々は、多くの方々のご協力を得ながらこのプロジェクトを進行させることができたと思っています。ということで今日は本当に長時間ご清聴いただきまして大変ありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

【司会】 ありがとうございます。以上をもちまして東亜同文書院大学記念センター主催の講演会を終了いたします。皆さん長時間お付き合いくださいまして、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。なお展示会のほうですけれども、本日6時まで行なっておりますので、またお時間のある限り展示室・展示コーナーのほうもご覧ください。ありがとうございました。お気を付けてお帰りくださいませ。